

皮膚科のトリビア

180

浅井 俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

〒240-0013 横浜市保土ケ谷区帷子町1-14

<http://www.asai-hihuka.com>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌編集委員の浅井先生が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第57回横浜北部皮膚科臨床懇話会から

令和元年6月13日

ヘルペス性毛包炎とは

頭皮、顔面、四肢などの毛包に一致して、紫斑や頂点に壊疽を伴う丘疹として出現。生検をすると毛包や脂腺の上皮細胞に局限して、巨細胞の出現などのヘルペスウイルス特有の病理組織学的変化を認める。単純ヘルペスウイルス(HSV)が原因の場合と水痘・帯状疱疹ウイルス(VZV)が原因の場合があり、HIV感染症、白血病、SLE、悪性腫瘍などの免疫抑制状態の患者に生じることが多い。

一言コメント

「それらしい患者をみたことはあるが、ヘルペス性毛包炎と診断したことはない。生検をしないと診断がつかないし、抗ウイルス薬の治療なしで自然に改善する例もあるので、判断がむずかしい。迅速診断キットが役に立つかもしれない。試みてみよう。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月15日

小児の果物アレルギーも花粉症が原因だった

97例の小児果物アレルギーを集計した結果。男児56例、女児41例とやや男児に多い。原因となる果物はリンゴ、モモ、キウイ、メロン、スイカの順に多かった。BETv1(PR-10群)の単独感作が33人(34%)、BETv2(profilin群)単独感作が12人(12%)、両群感作

が29人(30%)だった。PR-10感作例はリンゴ、モモで反応し、シラカンバ花粉と強い相関があった。Profilin感作例はスイカ、メロンで反応し、ラテックスと強い相関があった。両者の感作がない例24人はキウイ、バナナに反応する例が多かった。小児の果物アレルギーの多くは成人と同様にPollen Food Allergy Syndromeである。

一言コメント

「花粉の感作による鼻炎は低年齢化している。今後、小児の果物によるOASも増加するかもしれない。分類もわかりやすく、今後の検査の参考になった。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月15日

エボロクマブによるアトピー性皮膚炎の悪化

家族性高コレステロール血症の治療に用いられるエボロクマブは、プロタンブリン/ケキシン9型(PCSK9)に対する抗体製剤で、肝細胞表面のLDL受容体を増加させることによって血漿中LDL-C値を低下させる。40歳代男性は治療開始の1年4カ月後からアトピー性皮膚炎が増悪した。採血では血中IgEが1,186 IU、好酸球9.2%、TARC382 pg/mL。PCSK9はマクロファージや樹状細胞を活性化し、Th1細胞の分化を促す抗原提示細胞に誘導するので、エボロクマブ投与により、Th2細胞に拮抗するTh1細胞の活性が低下し、患者の素因が露呈した結果、アトピー性皮膚炎が増悪した可能性がある。

一言コメント

「アトピー性皮膚炎などのTh2が関与する疾患の悪化については添付文書には記載がないが、一応覚えておこう。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月15日

皮膚型NSAID不耐症は皮内テストの遅発型反応で確認できる

NSAIDや香辛料で蕁麻疹を生じた3症例。いずれも皮膚型NSAID不耐症と診断した。薬剤による皮膚テストで、即時型反応はすべて陰性だが、ロキソプロフェン、インドメサシンの皮内テストで、遅発性の反応が陽性となった。病理組織学的検査では真皮に好中球が主体の炎症性細胞浸潤を認めた。診断の一助になると思われる。

一言コメント

「なかなか証明できず、診断しづらい疾患だが、皮内テストの遅発相をみるという新しい発想である。皮内テスト2日目の病理組織像が好中球主体ということも、病態を物語っているかもしれない。試薬の濃度など、標準化が望まれる。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

シャルコー・ライデン結晶のできる仕組み

シャルコー・ライデン(Charcot-Leyden)結晶は痰、胸水、鼻汁などにみられる赤橙色の細長い菱形の無構造物で、崩壊した好酸球の顆粒が結晶化したものであり、種々のアレルギー疾患や寄生虫感染症で観察される。好酸球に多量に含まれるgalectin-10が結晶のもとになる蛋白である。好酸球は活性化に伴いネット状のDNAを放出する。これはNADPHオキシターゼによる活性酸素の産生を介した細胞死の結果であるが、核の凝集やDNAの断片化がおこらず、核膜と細胞膜の崩壊を伴うという特徴を有することから、Extracellular trap cell death(ETosis)と呼ばれている。好酸球はETosisを

おこす過程でgalectin-10を制御できなくなり、最終的に細胞が崩壊することが結晶化の原因で、複数の結晶が集まって顕微鏡的に確認できるようになると考えられる。

一言コメント

「大学生のころ、病理の実習でみたことがあるような気がする。好酸球が皮膚に浸潤する疾患がいくつかあるが、時間をかけて探してみよう。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

特発性間質性肺炎では抗CCP抗体を調べておく

抗シトルリン化ペプチド(CCP)抗体は、関節炎の発症に先だって数年前から血清中出现するため、関節リウマチ(RA)の早期診断に有用な自己抗体であり、関節破壊のリスクファクターとしても明らかとなっている。特発性間質性肺炎と初期診断された患者のうち、抗CCP抗体の測定を行った370例を後方視的に検討したところ、24例(6.5%)が陽性だった。観察期間中にRAを発症したのは陽性群では10例、陰性群では5例で、5年累積RA発症率は陽性群が55%、陰性群が2%だった。とくに若年あるいは女性の特発性間質性肺炎はRAの発症に注意して経過観察する必要がある。

一言コメント

「抗CCP抗体がRAの早期診断に有用なことはわかっていたが、特発性間質性肺炎の患者でも抗CCP抗体の測定をルーチンで行う意味があるということ。ちなみに抗CCP抗体の発見の始まりは表皮のフィラグリンに対する自己抗体が陽性率が高いこと、そして抗原性を発揮する上でフィラグリンがシトルリン化されることが重要であることがわかり、人工的に作製した環状化シトルリン化ペプチド(cyclic citrullinated peptide : CCP)を抗原とする抗CCP抗体の測定系がつくられたとのこと。フィラグリンとは知らなかった。」